

子泣き相撲の起源

最教寺の前身は、もともと勝音院(しょうおんいん)という曹洞宗の寺院でした。しかし、初代平戸藩主、松浦鎮信(まつらしげのぶ/ちんしん)公は、勝音院がある場所が、自身が信仰する真言宗の開祖、弘法大師空海ゆかりの地だったことから、住職の竜呑(りゅうどん)和尚に勝音院を移転してほしいと頼みました。

ところが、竜呑和尚は再三にわたる懇願を拒否したため、立腹した鎮信公は、勝音院を焼き払いました。竜呑和尚は、本尊の薬師如来像を守るため、自ら割腹して像を腹に納め、火から守り抜きました。和尚と一緒に弟子の英鉄(えいてつ)も焼死しました。

その後、勝音院のあった場所に最教寺が建立されましたが、鎮信公は、竜呑和尚と英鉄の亡霊に悩まされました。ある日、困り果てた鎮信公が最教寺を参詣しているとき、赤ちゃんの泣き声で、亡霊が退散し、以後悩まされることがなくなったことを起源として、赤ちゃん

が泣き声を競う「子泣き相撲」が始まったと言われています。



1.2.3_元気に泣く赤ちゃんたち 4_イクメンパパも多数参加 5_睨み?をきかす赤ちゃん 6_笑顔の赤ちゃん 7_寝てる赤ちゃん 8_海外からも参加 9_会場には、たくさんの観客やアマチュアカメラマンなどいました



節分の日、平戸市では「先に泣いたほうが勝ち」という一風変わった赤ちゃん相撲が行われます。この相撲に参加するため、全国各地から1歳前後の赤ちゃん力士たちが集まります。

「泣いたが勝ちよ、はっけいよい」の合図で、今年もたくさんの取組が行われました。



赤子の泣き声

健康祈願

2月3日、最教寺奥の院で「子泣き相撲」が開催されました。当日は、抜けるような青空に恵まれ、150組約300人の赤ちゃん力士が参加し、化粧まわしにねじり鉢巻を着け、東西に分かれて取組が行われました。参加者の中には、遠く関東やオーストラリアからも参加した親子もいました。取組では、泣き出す赤ちゃんだけでなく笑ってばかりや寝てばかりの赤ちゃんもいました。結びの一番千秋楽では、行司が泣かせようと必死に掛け声をかけるも、東西どちらも動じず、最後は行司の泣きがはいり、引き分けて終わるという取組に、会場は歓声と笑い声で溢れていました。



子泣き相撲で長年
行司を務める

かめやま ふじろう
亀山 富士郎さん

檀家や婦人部の協力のおかげ

昔は今のようになくさんの参加者はいなかったの
で、1人で全部の取組の行司をやっていました。し
かし、年々参加者も増えて1人では対応できる数で
はなくなってきたので、今では2人で対応していま
す。また、最近は赤ちゃんの名前の漢字が、通常
の読み方で読めないことが多くなり、読みあげるの
も大変になりましたね。

でも、一番大変なのは毎年、檀家さんや婦人部
の皆さんだと思います。檀家さんは、前日からテ
ント設営や舞台設置の準備を始めとして、当日の運
営や撤収まで全て自分たちで行っています。婦人部も、
年々参加者が増えて待っている人たちがお昼を過ぎ
て取組を待つ親子もでてきたため、お腹がすくだら
うということで、毎年会場内で振る舞いなどをしま
らってるのでありがたいですね。私は、ここの檀家
ではないのですがこのような活動をしている人たち
を見ていると、本当に頭が下がります。子泣き相撲
が、長年続けていけるのも、このような人たちのお
かけではないかと思ひます。私も少しでも皆さんの
協力ができればと思っていますので、体が元気なう
ちは行司を続けていきたいと思っています。



子泣き相撲を開催
する最教寺の住職

へんみ こうしん
邊見 光真さん

親から子へ受け継がれる行事

子泣き相撲は、私が最教寺の住職になる前から
あり、毎年多くの親子が参加しています。雨や雪の
年でも、寒い中朝早くからたくさん親子が順番待
ちをしていました。

そんな姿を見ていると、この子泣き相撲は、お寺
の伝統行事ということだけでなく、親から子への愛
情のあらわれじゃないかなと思ひました。平戸で生
まれ、この行事に参加して、地元を離れていった子
どもたちが、この日のために帰ってくる。親が子ど
もを参加させた行事に、その子がまた孫を連れて参
加するために帰省する。こんな行事って、お盆やお
正月以外ではなかなか無いと思ひます。子泣き相撲
はこのようにして、世代を超えて受け継がれていま
るんだなと思ひました。

最近、平戸に実家がなかったり、平戸出身で
はない親子が参加することも増えてきました。も
ともと最教寺奥の院は、他宗派や宗教もわけ隔てなく
内包する思想を説いた弘法大師空海ゆかりの地とし
て建立されました。そのためか、参加者は市内、
市外、また宗教、宗派を超えて参加することに違和
感がないのかもしれないね。

子泣き相撲の土俵下での取組

土俵の上で、赤ちゃんたちが
最高の相撲が取れるように
大人たちも、その土俵を支えています

参加者の声

やれることは自分たちでやって、伝統行事を残していきたい

毎年、お寺の総代会や奥の院の役員会などで役割分担などを決めていま
す。檀家さんも、与えられた役割は、きちんと全うしてくれるので、本当に助か
ります。近年は、参加者の増加で車の台数も増え、誘導する駐車場係が大変にな
ってきたのですが、観光協会の人たちにもボランティアで手伝ってもらって
いるので、事故もなくスムーズに誘導できています。

檀家も、年々高齢化してきて、協力できる人が少なくなってきましたが、お寺
の伝統行事を後世に残していくためにも、自分たちのやれる範囲で、早めに
準備するなどして続けていきたいと思っています。



檀家総代
たかた げんじ
高田 源治さん



まつやま ありさ
松山亜梨沙さん
まつやま あいと
松山 愛叶くん
(生月町)

義母が孫のために、深夜から並びました

子泣き相撲のことは以前から知っていて、今回参加した
いと義母に話したところ「たくさん並ぶって聞いたけん、私
が午前12時から並ぶよ」と言われ、そこまでしなくても
思ひながらもお願いしました。そのおかげもあって、1番
で取組ができました。

もともと人見知りしない子なんですが、肝心の取組でも
全く泣かず、ずっと行司の人の顔を見つめていました。息
子には、明るく元気で優しい子に育ってほしいですね。

子泣き相撲は、檀家を中心とした市民行事として毎年、開催しています。
子泣き相撲を開催するために、準備、運営、撤収まで携わる人たち。また、
子泣き相撲に参加する人たち。そんな人たちに、子泣き相撲に対しての思
いを聞きました。